養父母になった国際養子たち
スウェーデン, デンマークの事例から

Transnational Adoptees Who Became Transnational Adoptive Parents：
Scandinavian Cases

出口 顯

DEGUCHI Akira

はじめに
❶中国人の女の子の養父になった韓国人養子
❷韓国人養子の養母になった韓国人養女
❸南アフリカから養子をもらったアフリカ人養女
❹ベトナムの男の子の養父母になった韓国人養子とエクアドル人養女
❺エチオピアから養子をもらったエチオピア人養子
おわりに

［論文要旨］

スカンジナビア諸国では，不妊のカップルが子供をもつ選択肢として国際養子縁組が定着している。養子はアジア・アフリカ，南アメリカの諸国を出生国としており，国際養子は異人種間養子でもあり，親子の間に生物学的・遺伝子的絆がないのは，一目瞭然である。彼らの間では，遺伝子や血縁といった自然のつながりより，日々の生活をともにしたつながりが親子の絆として大切にされている。最近の国際養子縁組においては，養子に受け入れ国の一員としてだけでなく，出生国の文化を担った人間でもあるダブルアイデンティティをもたせようという考え方が浸透している。そのような中，国際養子が不妊になり，実子ではなく養子縁組によって家族を新たに形成するとき，養子の出生国選択の理由は何によるのか，養父母になった国際養子 5 例の事例を紹介し，生物学的特徴の類似性が決して重要ではないことを浮き彫りにする。

【キーワード】国際養子縁組，スウェーデン，デンマーク，アイデンティティ，生物学的親子関係

はじめに

身体と人格をめぐる言説と実践を考えるとき忘れてならないのは，個人の身体と人格のみを考察すればよいというものではなく，他者の身体と人格との関係においてそれを捉えなければならないということである。「他ならぬこの私」が「他ならぬこの身体」を所有するのはどういうことなのかという問いかけそのものに含まれている「他ならぬ」とは，「他」との関わりにおいてはじめて意識されるものだからである。こうした哲学的な問いかけの場合にとどまらず，様々な社会的場面において「私とは誰なのか」というアイデンティティを考える際にも，誰が私の親なのか，私はどの共同体の一員なのかという帰属意識を避けて通ることはできない。

関係性において身体と人格を考えるとき，国際養子縁組[(1)]は見落とすことのできない主題である［Howell 2007；19］。今日言われる国際養子縁組がスタートしたのは，朝鮮戦争以降であるが［拙稿2007］，トランスラショナルな養子縁組は，同時にその大多数がトランスレイシャルつまり人種間養子縁組でもある（表1から4を参照）。親はスカンジナビア系の白人であるのに対して，子供はアジア・アフリカ系あるいはラテンアメリカ系の人種であり，従って子供が親の実子でないことは，当人にとっても周囲にとっても一目瞭然である。

表1，3に見られるように，国際養子受け入れ国として数と割合でスペインが第二位ではあるが，これは近年の傾向であり[(2)]，40年近く国際養子縁組にかかわってきた歴史を持ち，人口10万人に対して国際養子がしめる割合が大きいのは，ノルウェーやスウェーデン，デンマークのスカンジナビア諸国である。これらの国は，第二次世界大戦後の移民や難民を度外視すれば，アメリカと異なり「人種」的には比較的均質な国家であった。そのため国際養子は，外見の異なる子供として周囲から「浮き出て」，好奇なまなざしの対象になりやすい存在だったとも言える。

こうした背景から，スカンジナビア諸国では国際養子のアイデンティティ形成について関心が持たれてきた。養子縁組がスタートした当初養子は100%受け入れ国の人間として自己規定することが求められていた。しかし，周囲から好奇の目で見られたり「どこからきたの」といった心ない問いかけをされることから，人格形成に問題が生じたり，そうでない場合でもルーツに対する関心には根強いものがあることもわかり，近年では養子は受け入れ国の人間であるが出生国の人間でもあり，出生国の文化や社会に対する理解と誇りをもたせようとするダブルアイデンティティという考えが主流を占めてきている［cf. 拙稿2007］。

しかし現在多くの養子は自分たちを完全なスウェーデン人（あるいはデンマーク人，ノルウェー人）として自己規定している。社会学や人類学の分野では，先進国の親になりたいという裕福なカップルによる発展途上国の貧しい家庭とその子供の金銭による搾取としての側面への批判だけでなく，国際養子に対する偏見や差別，新しい国の市民としてのアイデンティティの押しつけ，出生国との関わりを完全に断ち切る方針のあり方などについて，批判的な議論がなされてきている［cf. Yngvesson 2007，Kim 2007，Gullestad 2006］。しかし，スカンジナビアでは，自身がネパールからの養女の養母であるノルウェーの人類学者シグナ・ホヴェルがいうように，国際養子縁組は概してうまくいっているというべきだろう［Howell 2006，2007］。欧米でも血のつながりが親子関係の本質

表１　主な国際養子受け入れ国（1998－2007）

※太線は最高数値（2004 年）

受け入れ国	1998	2001	2003	2004	2006	2007
合衆国	15,774	19,237	21,616	**22,884**	20,679	19,613
スペイン	1,487	3,428	3,951	**5,541**	4.472	3,648
フランス	3,777	3,094	3,995	**4,079**	3,977	3,162
イタリア	2,233	1,797	2,772	**3,402**	3,188	3,420
カナダ	2,222	1,874	2,180	**1,955**	1,535	1,713
オランダ	825	1,122	1,154	**1,307**	816	778
スウェーデン	928	1,044	1,046	**1,109**	879	800
ノルウェー	643	713	714	**706**	448	426
デンマーク	624	631	523	**528**	447	429
オーストラリア	245	289	278	**370**	421	405

（ピーター・セルマンのデータから作成）

表2　国際養子拠出国ランキング（2003－2007）

※太線が最高値

	2003	2004	2005	2006	2007
中国	11,230	13,048	**14,493**	10,740	8,753
ロシア	7,745	**9,425**	7,471	6,752	4,844
グアテマラ	2,677	3,424	3,857	4,227	**4,844**
韓国	**2,287**	2,258	2,101	1,899	1,208
ウクライナ	**2,052**	2,021	1,705	1,031	1,611
コロンビア	**1,750**	1,741	1,434	1,595	1,597
インド	**1,172**	1,062	857	798	941
ハイチ	1,055	**1,159**	914	1,063	736
ブルガリア	**962**	378	125	96	87
ベトナム	935	483	1,190	1,364	**1,692**
カザフスタン	861	**903**	823	699	753
エチオピア	854	1,527	1,713	2,118	**2,975**
ベラルーシ	**656**	627	23	34	14
総数	41,530	45,288	43,857	39,742	37,526

※総数は，23 の受け入れ国に養子として送られた子供の人数
（ピーター・セルマンのデータから作成）

表3　国際養子受入れ上位国：
人口10万人に対する養子縁組の割合（1998－2007）

※太線は各国の最高値数

国	2007	人口 10 万人に対する養子縁組の割合			
		2006	2004	2001	1998
ノルウェー	9.1	9.6	15.4	**15.9**	14.6
スペイン	8.2	10.2	**13.0**	8.6	3.8
スウェーデン	8.8	9.7	**12.3**	11.8	10.5
デンマーク	7.9	8.3	9.8	9.8	**11.8**
アイルランド	9.1	7.4	**9.8**	9.3	3.3
オランダ	4.7	5.0	**8.1**	7.2	5.3
合衆国	6.4	6.8	**7.8**	7.6	5.8
フランス	5.1	6.5	**6.8**	6.7	6.4
カナダ	5.2	4.7	6.1	**7.0**	5.3
イタリア	5.8	5.4	**5.9**	4.8	3.9
ベルギー	3.4	3.7	4.5	4.2	**4.8**
オーストラリア	2.0	**2.1**	1.9	1.4	1.3
イギリス	0.6	0.6	0.6	0.5	0.4

（ピーター・セルマンのデータから作成）

表4　国際養子拠出国（1980－2007）**：養子数トップ 10**

1980-89	1998	2003	2006	2007
韓国	中国	中国	中国	中国
インド	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア
コロンビア	ベトナム	グアテマラ	グアテマラ	グアテマラ
ブラジル	韓国	韓国	エチオピア	エチオピア
スリランカ	コロンビア	ウクライナ	韓国	ベトナム
				トップ 5 ＞
チリ	インド	コロンビア	コロンビア	コロンビア
フィリピン	グアテマラ	インド	ベトナム	ウクライナ
グアテマラ	ルーマニア	ハイチ	ハイチ	韓国
ペルー	ブラジル	ブルガリア	ウクライナ	インド
エルサルバドル	エチオピア	ベトナム	インド	カザフスタン
				トップ 10 ＞

（ピーター・セルマンのデータから作成）

であるというイデオロギーは根強いけれども，養子にとって「本当の親」とは，生物学的（遺伝子的）親ではなく，育ててくれた親なのであり，その関係に培われて養子は，自らを韓国人やインド人としてではなく，何よりもまずスウェーデン人として自己規定するのである。国際養子縁組の歴史が40年を越えた今日のスカンジナビアでは，「目が青くなく，肌が白くない」スウェーデン人がいるのは何らおかしなことではなくなってきているのである。

当初は第三世界のめぐまれない孤児を救おうという人道主義的な見地からスタートしたスカンジナビアの国際養子縁組だが，今日では不妊治療の代替策として定着している。なかには肉体的不快感や苦痛を伴う体外受精を試みず最初から国際養子縁組を親になる手段として選択するカップルもいる。その理由の一つとして，彼らの身近に国際養子がいたという背景をあげることができる。

例えばイルヴァという31歳の女性（2003年当時）は，幼い頃からクラスメートの中に韓国からの養子がいて国際養子に対する違和感が全くなかった。それは夫も同様だったという。また，イルヴァの父のイトコは韓国に住んで韓国の女性と結婚した。だから彼女の家族は韓国にもつながりがある。さらに彼女の姉もスウェーデン国内からもらわれてきた養女だった。こういった背景があったため，2年間子どもができず，検査でも特に原因が見つからなかったとき，「子どもができないときは再び失望を味わうことになる，精神的にもきつい不妊治療を続けるよりは国際養子を韓国からもらおう」と考えたという。遺伝子を受け継いだ子どもを持つことが大事なのではなく，親になりたかったのだと彼女は語った。彼女たち夫婦は2002年に韓国から男の子を養子にもらった。(3)

このような社会環境の中で，国際養子が成長し不妊になったとき，彼らもやはり国際養子縁組を選択するのだろうか。その際養子の出生国を選択する基準とは何になるのだろうか。生みの親は本当の親ではないといい，育ての親に愛情と心理的一体感をもつ彼らが国際養子を決断するとき，「血は水よりも少しも濃くなく」，自らと同じ出生国から養子をもらおうとは全く考えないのだろうか。養親になった国際養子にとって，身体と人格をめぐる言説の中で，生物学的関係とはどのような重みをもつあるいはもたないのだろうか。

こうした問題意識に基づき，以下では，養親になった国際養子たちの考えを筆者自身の調査に基づき再構成してみたい（以下，養子の名前は仮名にしてある）。

❶……中国人の女の子の養父になった韓国人養子

ジョンは1973年韓国生まれ，生後16ヶ月のときスウェーデンへきた。現在はストックホルムに住み，不動産業を営んでいる。エクアドルから養女に来た妹が一人いる。養父は保険会社のマネージコンサルタント，養母は製薬関係の仕事をしていた。

ジョンはまだ生まれた国韓国に行ったことがない。「韓国に行ったら実の親を捜したいか」という質問に対して，以下のように答えてくれた。

> それは養子について議論されるときよく言われることだが，出生についての情報が私の場合にはあまりない。またルーツを探りたいと思うタイプでもないし，これまでの人生でルーツを見つけるということは重大な問題ではなかった。しかし妹の場合は違う。彼女は生みの親の名前や年齢について知っていた。10年間つきあっていたボーイフレンドとの関係が壊れたとき，

彼女は自分のルーツをたどってみようという結論に達して，エクアドルの山岳地帯に出かけた。妹は母親のいる村にたどりついたが，これでもう十分と感じて実の母には会わなかった。その後彼女はエクアドルやアルゼンチンなどを半年間旅して帰ってきた。しかし私にはまだ実の母を見つけたいという妹のような気持ちはない。養子というだけでそういう深い心理学的衝動があるはずだとも思わない。何故そういう気持ちをもたなくてはならないのかと思ってしまう。生みの親が恋しくないのとこれまで繰り返し尋ねられてきた。でも［生まれてまもなく警察署の前に置き去りにされて親のことは何も覚えていないのだから―出口補足，以下同様］そういうことは情報でしかない。

ジョンは2005年に結婚した。妻は白人のスウェーデン人である。妻が不妊で一度IVFを試みたが妊娠に至らなかった。妻は1967年生まれで39歳だった。スウェーデンには不妊治療を受けられる年齢制限があるので，治療を続けることはできなかった。そのとき夫婦で話し合って養子をもらうことに決めた。

私自身が養子だったこともあり，それはとても自然なことだった。しかしはじめから養子をもらおうと考えていたのではなく，不妊治療が失敗したときはじめて思い浮かんだ選択肢だった［強調は出口］。

不妊のカップルが養子縁組を選択するとき，決断のためには「心理的な壁」を壊す必要があるとジョンは言う。

人にはよその国についてそれぞれ異なる知識や体験がある。外国には黒い髪，赤い皮膚，黄色い皮膚の人がいて，なじみのない世界だ。そこから養子をもらうのは一大事なのだ。だから，壁を壊して精神的一歩を踏み出さなくてはならない。養子縁組とは精神的な問題だ。違う国から養子を迎えるにはどうすればいいか，費用はどれくらいかなど，それは大きな綱渡りのようなものだ。

ジョンは，自分が養子だったこともあり，「養子縁組とは何か」と悩むこともなかったし，エチオピアの養子が友達にいたこともあって，異文化にたいして開かれていたという。またスウェーデン北部や南部と違って，ストックホルムは異文化・異人種が混交した地域なので，世界中を旅して異なる文化を吸収しようとするのに役立ったそうだ。

ジョン夫妻は2005年9月に中国へ養子縁組の申請書類を提出した。2007年5月に養子になる子どもが見つかったという報せが入り，同年6月に中国へ渡航，17日間滞在し子どもをひきとった。女の子で2005年9月生まれだった。何故中国を選んだのだろうか。

はっきりしたことはもう覚えていないが，待機時間が短いとかコストが安いという理由からだったと思う。かかった費用は100,000クローネでうち40,000クローネは国家から払い戻しがあった[(4)]。それより面白いのは，私が韓国から来たからということで何故韓国から養子をもらおうとしないのかと質問されることだ。それは何故韓国へ行ってみたいと思わないのかという質問と同じことだ。人々はいつも私と韓国を結びつけたがる。私はいつも「何故，どうして」という問いに対処し続けなくてはならなかった。何故そうした「何故」という問いがとても頻繁に発せられるのかは，とても興味深い。私が韓国から来たからといって韓国から養子をもらおうとは望んだりも思ったりもしなかった。韓国からというのはそれほど重要ではなかった。そ

れに養親候補者には最低3年の結婚生活を条件として韓国は求めている。私たちはそれに合致していなかったので，韓国は選択肢からはすぐ捨てた。韓国でなくてはならないとは思いもしなかった。中国は結婚の期間を条件にしていなかったからすぐ中国に決めた［韓国と同じ東アジアだからということではない］。

今日のスウェーデンの養親たちの多くは，ダブルアイデンティティ育成から，養子に出生国の文化を教えようとするが，自分自身が養子だったジョンはどう思うのか，養女と一緒に中国に行きたいか，中国の文化を教えるつもりか尋ねてみた。

子どもが大きくなったらもちろん一緒に行きたい。しかし中国のことを教えるつもりはない。私の両親（養父母のこと）は，韓国の本を見せたり韓国の文化を教えたりは一度もしなかった。韓国に触れるような状況に私を置くこともなかった[(5)]。それが私には自然だった。1歳半のとき韓国から養子にきたということを私は知っているのであって覚えているのではない。私が育てられ生活したのはスウェーデンであって，私はスウェーデンというパッケージを得たのだ。白人のスウェーデン人の友達に「1歳の頃のことを覚えているか」と聞くとたいてい覚えていない。私にとって韓国とはそこから養子にきたということだけであって，韓国のことを覚えているわけではないのだ。

近年スウェーデンでは，特に韓国からの養子たちが国際養子縁組そのものに対して批判的な発言をしていてメディアでもたびたびとりあげられている。最後にこのことについてどう思うか尋ねてみた。

養子について書いてあるものには，話しを売るという目的がある。つぎに養子の方が生粋のスウェーデン人に比べ犯罪率や自殺率が高いという統計だが，スウェーデンにいるトルコ人の10%が罪を犯して刑務所に入れられているというのと同じだ。だけどたいていの囚人はスウェーデン人だから，養子たちの数少ないデータからパーセンテージを引き出す統計は間違っている。スウェーデンの国際養子たちは本に書かれている以上にとてもよくやっていると私は思う。メディアでとりあげられているよりも養子縁組はいいことだと思う。

❷……韓国人養子の養母になった韓国人養女

ジョンが自身の出生国から養子をもらうことにこだわりを持っていなかったのに対して，自分の生まれた韓国から養子をもらうのが自然だったというのは，コペンハーゲン近郊にすむブリジットである。しかし「自然だった」と言っても「血のこだわり」があるというのではない。

ブリジットは1966年生まれで，1967年にデンマークに来た。デンマークの最初の国際養子の一人で，当時新聞にも写真入りで報道された。しかし現在のようにNGOの斡旋機関を通したのではなかった。

ブリジットの養父母は，織物を輸入するある実業家家族のために働いていた。実業家はさまざまな芸術家を客として招いていたが，その中に韓国の著名な芸術家カップルがいた。彼らが滞在していたとき，養父母たちも会い韓国人はとてもすてきな人だと思うようになった。それを知った実業家が，仕事で韓国を訪問したとき，知人の韓国人医師に頼んで子どものいない養父母のために，養

子になる子を探して施設を回った。この子がいいと実業家夫人がある病院にいたブリジットを選び，彼女はデンマークに来ることになった。

ブリジットは1988年，ソウルオリンピックの直前に養父母とともに初めて韓国を旅行した。その1年後の1989年にはサマーキャンプに招待されて3週間韓国に滞在した。1997年にも訪問している。また韓国からの養子をデンマークに連れてくる付き添いをしたこともある。彼女は韓国についてたくさん経験をしてきたという。そのことが彼女の中に韓国への親近感を高めたようだ。

彼女の周囲にも韓国から養子をもらっている人たちが多くいた。ノルウェー人である彼女の夫の叔父には養子（韓国からの息子，中国からの娘）がいる。彼女の養父母の雇い主には娘がいて，姉として慕っているが，彼女にも韓国からの息子が二人いる。また最初の韓国旅行で知り合いになった韓国人養子であるデンマークの男性は，やはり韓国人養女であるノルウェー人と結婚している。彼らとは今でも親しくつきあっている。

このように，彼女には「韓国」とのつながりが多くあった。だから養子縁組を希望したとき韓国は自然な選択だったのである。しかしそれだけではない。彼女は韓国を旅行した体験から，養子縁組される前のこどもが預けられる里親制度についても知っていて，それがとても気に入っていたという。

施設でずっと育つより，里親の元で暮らすことが，人生のいいスタートを始められると思う。東ヨーロッパ，南アメリカ，中国の養子縁組のしくみは好きではない。特に施設の大きな部屋の中のたくさんのベッドで子どもが寝かされて大人とのふれあいがあまりないのはよくない。不衛生なだけでなく，大人の愛情ややさしさ，ケアがないのは問題だわ。

ブリジット夫婦が養子をもらおうと思ったのは，彼女が糖尿病を患っていて高齢の妊娠はリスクが高いためである。2000年に出会った彼女たちが，養子縁組を決意したのが2002年，最初の申請書類が韓国に送られたのは2003年10月，しかし子どもが見つかったという連絡が入ったのは2007年2月だった。実際に引き取りにいったのは2007年6月で，かなり長い時間待たされたことがわかる。その理由の一つが韓国では養親候補者が結婚して3年以上たってなければならないという条件であり，2002年当時彼女たちはまだ正式に結婚していなかった。夫はノルウェーにいたから養子申請をするのに求められる十分な時間を一緒に暮らしていたのではなかった。そのため当時その条件を充たしていなかったので，申請まで18ヶ月間一緒に暮らさなくてはならなかった。彼女たちが正式に結婚したのは2004年2月だった。

私たちはとても出遅れた。［事態を進展させようとすると］いつも時間が私たちを押し戻した。ブリジットはそういうのだが，しかし彼女たちはジョンのように手続きがすぐ済む他国を選びはしなかった。夫が「どこか望みの国があるかい」と聞いたときも「いいえ，韓国がだめならどこも」と答えたという。養子に出るまえに子どもは里親の元で育てられるというシステムについての知識も含めた，韓国とのつながりが自然なことだったのだろう。

しかし，彼女が韓国から来たという事実は，韓国の選択に決定的ではなかったように思われる。「どこから来たの」とか「韓国語は話せるの」といった馬鹿げた質問をたくさんされたけど，そんなに気にはしなかったし，外見の違いから自分がデンマーク人であるかどうか悩んだことはなかったという。

小さい頃私は120%デンマーク人だった。私は韓国人だと言われてもそれに気づいていなかった。でも小学校のクラス写真を最初に見たとき自分の外見がどんなに違っているかわかった。7歳のときだったわ。それからよ，私には他の友達とは違ったバックグラウンドがあることに気づくようになった。でも自分が誰かわからないとか，デンマーク人なのか韓国人なのかわからないと感じたことはない。今私は自分が韓国人であることを自覚しているけど，それ以上にデンマーク人なの。小学校のとき先生が両親にこの子は他の子よりデンマーク人らしいとよく言ったものよ。とても面白いでしょ。国歌を全部歌えたの。

デンマーク人として自らを規定しているという点では彼女はジョンと共通している。彼女は1988年に最初に韓国に行くまで，デンマークの韓国人や韓国人養子と接触することはあまりなかった。最初に韓国に行ったときも韓国のことは好きになったが，自分はデンマーク人だと思ったという。

デンマークと韓国は大きく違っていた。人々の振る舞いや歩き方も違っていたし。そういう点では自分を韓国人だとは思わなかった。韓国の人にも，あなたは見た目は韓国人だが韓国人じゃないわね，すぐわかるわと言われた。

韓国には4回行ったが，どの時も生物学的な親を捜そうとは思わなかったという。

生みの母は私を生んだとき死んだと聞かされていたし，かりに生きていたとしても英語が話せないだろうからコミュニケーションもできないでしょうし。それになによりデンマーク人の両親で私はとても幸せだったし，彼らの気持ちを傷つけたくなかった。…両親は私にいつも自信を与えてくれた。自分を信頼することとか自分を愛することとかね。とても多くのすばらしい価値あるものを与えてくれたわ。

同じことを彼女夫婦は養子クリスにも与えたいと思っている。彼女の養父母にとって彼女の誕生日より彼女がデンマークに来た日がとても大切だった。彼女が生まれたとき彼らは韓国にいなかったし，引き取りに韓国に行ったのでもなかった。だから彼女の家ではいつもホームカミングデイ（デンマークに来た日）を祝う。今は彼女たちが息子のホームカミングデイのお祝いをしている。

彼女は自分が韓国出身だから，自分と外見が同じで同じ出生の背景をもつ子どもが欲しいから，韓国を選んだのではないのだ。韓国とは彼女にとって，自分を育ててくれた養父母との生活の中で培われ広がっていった人との絆や体験そして知識のことなのである。

❸……南アフリカから養子をもらったアフリカ人養女

サンドラは1975年西アフリカのリベリア生まれ，1976年生後8ヶ月のときにスウェーデンに養女としてやってくる。現在はスウェーデン西部の都市に暮らしている。彼女にはインドから養女に来た2歳年下の妹がいる。彼女が他の多くの国際養子と異なるのは，生物学上の両親に会っていることである。ただし，会いに出かけたのは生まれたリベリアではなく，生物学的両親の移住先だったアメリカである。

サンドラの生みの母は，彼女を妊娠したとき学生だった。実母は学校を卒業したかったのでサンドラを2, 3年スウェーデンに預け，卒業してから連れ戻すつもりだった。サンドラの養父母は生みの母と手紙のやり取りをしていたが，生みの母の意図や養子縁組にいたる事情を全然知らず正式な

養子縁組だと思っていたので，ずっと彼女を手許において育てるつもりだった。養子縁組から2,3年して生みの母が娘を返してほしいと手紙をよこしたので，養父母は音信を絶ってしまった。

1997年22歳の時彼女はストックホルムに住む女性から突然手紙をもらった。その女性はサンドラの生物学的弟とインターネット上でコンタクトがあったと知らせてきた。そして，彼女は生みの母から手紙をもらう。手紙をもらったときはとても衝撃を受けたという。養父母から生みの母親について何も聞いていなかったからでもある。既に一緒に暮らしていた夫（当時はまだサムボ関係[6]で，正式な結婚は2002年）もショックを受けた。彼女は夫や養父母とどう対処するか話し合った。彼らはサンドラが生物学的親に会うのを応援してくれたが，養父母（当時はもう離婚していた）はとても神経質になっていたという。しかし実際に生みの母に会ったのはそれから3年後だった。気持ちを整理するのに時間がかかったからである。

生みの親に会う機会ができたのはとても嬉しかったけど，旅は感情の起伏の大きいものだったわ。夫も一緒に行ったの。生みの母と父はもう別れていて別々の州にすんでいました。両方を訪ね，親の家に泊まりました。でも今だったらホテルに泊まることを選んだでしょうね。生みの母は，私たちが「本当の」母と娘の関係には決してなれないということがわかるのにかなり時間がかかったようです。

生みの親と育ての親，彼女には二人の父と二人の母がいることになると思わないかと尋ねた。

いいえ。私には母は一人，父は一人しかいません。養父母の方です。彼らが私を育ててくれたの。私がmamma（スウェーデン語のママ）と呼ぶのは，スウェーデンの母です。「私のお母さん」と私が言うのは養母のことなの。生みの母をmamaと英語で呼ぶけど，それは感情のこもったものではないわ。スウェーデンの母をmammaとは呼ぶ時は，もっと近しい気持ちがあります。

だから生みの親には，私にはもう親がいて私たちが決して「本当の母娘」関係にはなることができないのをわかってほしかったの。

サンドラ夫婦はIVF（体外受精）を4回試みた。4度目に妊娠したが流産し，養子をもらうことに決めたという。2001年だった。2002年から地方自治体のソーシャルワーカーと面接を5回行い，斡旋団体であるアドプフーンスセントルム（Adoptionscentrum）に申請書類を送った。スウェーデンでは養子縁組に必要な手続きは民間の斡旋団体が行い，現在6団体が存在する[7]。その中でこの団体を選んだのは，アフリカからの養子縁組ができるのはそこだけだったからである。

私たちはアフリカから養子が欲しかったの。アフリカで養子がもらえる国は南アフリカとエチオピアだけでした。南アフリカは子どものケアがとてもしっかりしていて養護施設もよさそうだったので，南アフリカに決めたの。

何故アフリカだったのか。彼女自身がアフリカから来ているから，同じ国ではないにしてもアフリカから欲しかったのだろうか。

私も最初はそう思っていたわ。でもそのうちに見た目が同じというのは大事ではなくなったの。一番大切なのは子どもが欲しいということ。［後で述べるように養子を二人迎えた］今かりに三人目の養子をもらうとしたら中国とかを選ぶでしょうね。

こうした気持ちの変化は，「コース」と称されるプログラム（養子縁組を考えているカップルやシ

ングルの女性むけに斡旋団体や自治体が主催するもの）に参加するようになってからだという。養子をもらう国として南米のコロンビアも考えたが，赤ん坊が小さいときに引き取れること，そして手続きが早いということで，南アフリカにしたという。

コロンビアは手続きに時間が長くかかるし子どもたちも2歳を超えていることがあります。それに［引き取りにいって］5，6週間はコロンビアに滞在しなくてはいけないでしょ［実際には8週間］。

2002年秋に地方自治体から養親候補者として認められた後2003年1月に南アフリカに書類が送られ，生後3ヶ月の男の子が見つかったという連絡が入ったのは2003年6月だった。この男の子はリオと名づけられた。

養子は最初から二人もらおうと決めていたので[8]，2005年の3月頃再び手続きを開始したの。同じように南アフリカに申請して待ったのは7ヶ月ほど。養親としてふさわしいかどうか調べるための面接は最初の申請時にもうやったから，今回は二度ほどしかソーシャルワーカーには会わなかった。二人目のミルトンは2005年4月生まれで2005年11月に養子縁組したわ。

リオと同じ南アフリカにしたのは，手続きのプロセスがとても手際よく，訪れてとても好きになったから。

それに兄弟が同じようなバックグラウンドを持っていたら，いつか南アフリカへ行くとき二人で一緒にいけるでしょ。

ミルトンを引き取りに南アフリカに行った時は，リオも連れて行き，彼がいた施設を訪ねたという。二人の養子を育てるとき，サンドラ自身が養女であった体験が役に立っているようだ。彼女の世代は大抵そうだが，養父母が養子を引き取りにその出生国まで出かけていない。そのため子どもは出生国についてほとんど何も教えられていない。そうした場合の養子の気持ちや反応の仕方などがよくわかるから，サンドラと夫は子どもたちに南アフリカや出生の背景を語って聞かせている。リオの場合は生みの母が誰か，ミルトンの場合は両親が誰かわかっており，既にそのことを子どもたちに伝えてある。南アフリカというバックグラウンドに誇りをもち，そこを心地よく感じてほしいと思っているからである。

でも子どもたちには，まず自分がスウェーデン人だと感じてほしい。だってここで彼らは育っているし，ここが彼らの国なのよ。

彼女の母としてのストーリーはここで終わらない。リオをもらった後自然妊娠・流産を2度体験し，3度目の妊娠でリオとミルトンにとって弟になるビンセントが生まれたのである。調査時に彼は生後9ヶ月だった。実子が生まれたことは彼女には特別な体験だったのだろうか。そうではない。

何も大きな違いはないわ。ビンセントは私にも夫にも似ているけれど，だからといって他の二人以上に彼だけを特別愛しているというのではない。むしろ，リオの方がとても特別な存在ね。リオをもらうまで長いあいだずっと子どもが欲しいと思っていたから[9]。「自分の子どもが生まれてとても幸せでしょ」とよく聞かれるけど，聞かれるたびにとてもとまどったわ。なぜそんな風に聞いてくるのかもわからなかった。リオもミルトンも私の子どもにかわりはないわ。あの子たちも「本当の子」よ。

❹……ベトナムの男の子の養父母になった韓国人養子とエクアドル人養女

アンダースとカリンはともに国際養子，しかもそれぞれの出生国が違うという珍しい夫婦である。アンダースは1977年2月韓国生まれ，生後6ヶ月の時スウェーデンにきた。両親（養父母のこと，以下同じ）は子どもを欲しがったが恵まれなかった。その頃［アンダースからみて］父方のおじが韓国から養子をもらい［アンダースより3歳年上］，とてもうまくいっていたので，両親も韓国から養子をもらうことにした。成長するとストックホルムでデザインを勉強した後，ロンドンでも2年半デザインの勉強を続けた。ロンドン滞在中に韓国人女性と知り合いになり，スウェーデンに帰国後，韓国にいる彼女を訪ねる機会ができた。2001年24歳の時で，韓国には2週間滞在した。

アンダースは子どもの時も成人してからもあまり韓国に興味がなく，そのときが最初の韓国旅行だった。

> 私はいつも自分をスウェーデン人だと思ってきたし，友人やコミュニティから疎外されたと感じたこともなかった。外見は違うが，それ以外は完全にスウェーデン人だと思ってきた。だから自分のルーツを探す必要性も感じなかった。もし自分自身に不安を感じておらず，スウェーデン風の名前を持ち，生粋のスウェーデン人家族のもとで育ったら，外見が違っていても，周囲も受け入れてくれると思う。

従ってアンダースにとって韓国旅行は，韓国の人たちと自分がいかに違うかを体験させる旅行となった。彼はいつもスウェーデン人として振る舞っていて韓国語も知らなかった。しかし韓国の人は彼を完全な韓国人とみなした。空港で荷物が行方不明になるトラブルが起きたとき，案内所で韓国が話せないから英語でと言い，女性職員もわかったように見えたのに韓国語で話し続けてきた。とはいえ，この旅行で韓国の文化に興味をかき立てられもっと知りたいと思うようにもなった。しかし帰国すると仕事に忙しく韓国のことを学ぶ余裕もなかったし，またスウェーデン人だけれど韓国人であるというダブルアイデンティティをもつこともなかった。

> スウェーデンでそんな風に感じる養子もいるし，それは理解できる。でも私自身は自分をそんなふうには捉えてこなかった。私は一つのアイデンティティしか感じていない。私は自分が誰なのかはっきりわかっている。

この韓国旅行から戻ると旅のことをアンダースはブログに書き綴った。それを読んだのがカリンで，二人はインターネット上で話し合うようになり，やがて実際に会うようになった。

カリンはエクアドルからの養女である。1975年に生後2ヶ月半でスウェーデンに来た。彼女の養父母［以下，両親］は，実子をもつことが重要だとは考えていなかった。世界中には親を必要とする子どもがたくさんいる，だから養子をもらい，そのあとで実の子も生まれればいいと思っていた。両親は最初別の女の子をもらう予定でいたが，彼女がスウェーデンにくる直前にその子の祖母が育てることに決めたという連絡が斡旋団体に入り，その縁組は実現しなかった。団体は代わりにエクアドルで生まれたばかりの子を両親の養女として手続きをすすめたという。それがカリンである。彼女は子どもの時の思い出を次のように話した。

> 3歳だった頃母が隣人の女性と話していました。彼女は妊婦でおなかがとても大きかった。私

は彼女のおなかを指差して「私はおなかから生まれていないわ」って言いました。隣人の女性は「それじゃあ，どこから来たの」と聞きました。私は空を指差して「飛行機で来たの」って言ったんです。私にとってそれは普通のことでした。両親はいつも［ストックホルム郊外のアーランダ空港で出迎えて］私を手にしたすばらしい日のことを話してくれました。彼らの人生で最も美しい日だったと。両親の幸福は私と私の弟が来たことでした。だから「飛行機で来た」というのは，私にとってはとても自然なことでした。それでかなり早い頃から学校で友達の誰彼にこの話しをしていたんです。

カリンの養父母への愛情にはとても強いものがある。

子どもの頃は親を失うことがとても怖かったんです。エクアドルの誰かが私を連れ戻しにくるのが怖かった。両親はそんなことはあり得ないし，私たちはずっとお前の親だよと言いましたが，信じられませんでした。5，6歳の頃から両親はエクアドルへ行くかいと毎年のように訊ねてきましたが，その度に「ノー」といいました。両親が本当の親だと感じていました。それに私の最初の母，生みの母が本当の母だと両親が言うのが好きではありませんでした。「お母さん，そんなこと言わないでよ，お母さんが私の本当のお母さんよ！」と私は言いました。「彼女は私の出産の母か，最初の母というだけよ，本当のお母さんじゃない」と自分が正しいと思っていることを言うのが私には大事でした。私が知っている唯一の母は養母なんです。

養親たちが養子をもらうとき，家族としての肉体的な一体感をもてるようになるために外見的特徴の類似を重視していることが指摘されているが［Marre and Bestard 2009］，それは養親の側だけにとどまらない。

私は歩き方，話し方，性格が父とそっくりだと皆が言うんです。弟は母にそっくりです。生物学的親子でなくても親の仕草を子どもがピックアップして同じように振る舞っていることが大切なんです。それから，2007年私の腸に腫瘍が見つかったとき，医者は家系によるものか聞いてきました。私は「はい」と答えました。医者は驚きました。家族の中の誰かに腫瘍があるなら深刻なものになるかもしれないって。それで私は自分が養女だということを伝えました。私の父は生物学的父ではないけれど私にとっては唯一の父なんです。「お父さん，お母さんに病気があるか」と聞かれると，私は「はい」と答えてしまい，それから遺伝的つながりがないことを思い出したんです。父も母もガンでしたが，生き延びました。私にも腫瘍が見つかったとき両親は驚きました。［遺伝的つながりはないのに同じような病気にかかるくらい］私たちは結びつきの強い家族でした。

カリンの両親は彼女を迎えた後実子をつくろうとするが，カリンが1歳のとき養母は子宮がんにかかり子宮を摘出，実子が生めなくなった。そこで男の子をチリから養子にもらった。弟は2歳半でスウェーデンに来た。それまでに8カ所も里親のところを転々とし，虐げられていて，特別なケアが必要だったという。

弟が私たち家族の一員になり私たちを信頼してくれるのに2年くらいかかりました。両親が弟のもとを去りはしないということがわかり両親を信頼するようになりました。弟も両親がいなくなることが怖かったんです。今弟は自信を持ちいい人生を送っています。弟の生みの親の名前はわかっていますが，チリで探し出すつもりはないようです。でもチリに行ってみたいとは

思っているようです。私たちの両親が私たちを本当の子どもとして扱ってくれたので弟はスウェーデンでうまくやってこれたんです。

養父母と強い愛情で結ばれたカリン。彼女ほどではないかもしれないがアンダースも同様である。彼は生物学的両親の名前がわかっているという。養子縁組の際に韓国からうけとった記録に書かれていたらしい。しかし韓国の文化や国について興味があったが生みの親にはなかった，スウェーデンに自分の両親がいると思っていたからだ。そのようなカップルにとってなかなか実子が生まれなかったとき養子縁組を選択するのは自然なことといえるだろう。アンダースはいう。

ふつうのスウェーデン人にとって，子どもができないから外国から養子をというのは，大きな一歩を踏み出すことだと思うけど，私たちの場合，子どもができないから養子をもらおうと思うのはとても自然だった。

カリンは詳しく説明してくれた。

私たちは私たちの父母が私たちを子供として迎えた時感じたのと同じ体験をしたかった。彼らは私たちをどんなに愛しているか話してくれてきたし，私の両親は，私と弟が来たとき嬉しくて泣き出し，話すことができなかった。

私は医学的治療を受けたくなかった。もし妊娠しなかったら，薬を投与されたり外科手術を受けることになる。それはしたくなかった。そうしなくてはならないなら養子をもらおうと私たちは考えたんです。自分の子がほしいと夢見たこともありませんでした。小さい頃人形で遊んでいた時母が「赤ん坊はどうやってあなたのところに来るの」と聞いてきたけど，おなかの中からということをがんとして認めませんでした。実の子を生むのは重要ではありませんでした。私はただ母になりたかっただけです。

自分が生んだ子でなくても子どもをどんなに愛することができるか私たちはわかっていました。でもヴィク［彼女たちの養子］を引き取りにいく時は少し不安でした。もしこの子を好きになれなかったらどうしよう，この子が私たちのことを好きにならなかったらどうしようと。でも最初から愛はありました。

養子をもらおうと決めたのは2004年1月，養親候補者として承認されたのが同年6月だった。養子は南アメリカかアジアからもらおうと話し合っていた。

アフリカからでも私たちは気にしません。でもカリンが南アメリカ出身で私がアジアから，そしてスウェーデンに住んでいますから，アフリカの子どもが来たらUN（国連）のようだとそのときは思いました（笑い）。

斡旋団体と話し合い，［カリンの出身国である］エクアドルから養子をもらうことにして申請書類を送ったのだが，2005年は1年間何事も起こらなかった。2006年に斡旋団体に問い合わせてもエクアドルで事態に進展があるのか全くわからなかった。エクアドルは韓国同様，まず国内で養親を見つけることに方針を転換していたようだ。そのため，夫婦はエクアドルをやめてベトナムに新たに申請書類を送ろうとした。そのときだ，ベトナムから彼らの息子になるヴィクの書類が届いたのは。2007年4月だった。何が起きたのかわからず，とても混乱したという。もう1年くらい待つと思っていたのだ。

目に病気のある子どもなので急いで養親を探しているという手紙でした。この子が欲しいです

かと書いてあったので「ええぜひ」と答えました。ですからベトナムへ送ったのは養子申請の一般的な書類ではなくて，この子［ヴィク］を養子にもらう申請書類になりました。私たちがベトナムに行く前に必要な警察の報告書や医療報告書が届くまで，それから半年待ちました。

2007年10月ベトナムにでかけた。ヴィクは当時13ヶ月だった。同年11月10日に帰国した。ブリジットの家族同様，誕生日だけでなくこの日も祝っているという。リビングの壁にはデザインを職業としているアンダースが作成したヴィクの写真入りの新聞が飾ってあった。見出しは「ヴィクが来るまで3年待った」である。

アンダースもカリンも自分たちをスウェーデン人としてのみ規定し，いわゆるダブルアイデンティティの持ち主ではない。しかしもしヴィクが自分のルーツに関することは何でも知りたいと思ったら手助けするのを惜しまないし，興味を持たない場合でも情報を遠ざけることはすまいと思っている。それにベトナムのことを少しは知ってほしいと思っている。彼らはベトナムの休日も祝うのだが，それは彼の生まれた国が彼らにとってどんなに大事かをあらわす彼らなりのやり方なのである。そしていつの日かベトナムへぜひ行きたいと言ってくれるようになったらと思っている。養子以上に養親が出生国のことに夢中になることがあるが［拙稿 2007］，彼らの場合も同様のようだ。

取材当時［2009年9月］カリンは妊娠していた。クリスマス頃出産の予定だ。

実子と養子を違った風に育てまい，接し方に分け隔てがないようにしようと私たちは決めたんです。もしそんなことをしたら，養子の中には引き裂かれたパーソナリティを持つ人も出てくるでしょう。

サンドラも同じ思いだろう。

❺……エチオピアから養子をもらったエチオピア人養子

マークの場合はこれまでの事例と異なるところがある。エチオピアからの養子だった彼は今の妻ロッタと一緒になった時，エチオピア人の養子が欲しかったのだという。

1969年8月生まれのマークがスウェーデンに来たのは生後16ヶ月の1970年12月クリスマスシーズンだった。彼の（養）祖父が児童福祉のNGOであるSave the Childrenで働いており，その農業関係のプロジェクトに携わるため長らくエチオピアに滞在していた。彼をスウェーデンまで連れてきてくれたのはその祖父だった。養父母には既に実の娘がいたが，健康上の問題で二人目の子をもつのが難しく，養子縁組を決めたのではないかとマークは言っている。しかし彼が家族の一員になった後養父母には息子が生まれている。結果的に，三人の子どもの中で養子は彼だけになった。そのことが孤立感につながらなかったのだろうか。

自分がまわりと違うという感覚はあったけど。両親にはまず生物学的子どもがいて，私が来た後にも結局実子が生まれた。子供ができないから養子をもらったのではないことははっきりしている。「子供が欲しかった」のではなく，本当に「私」が欲しかったんだ，だから自分はここにいる，そんな風に考えてきた。

子供ができないからその代わりとしてではなくて，そもそも養子が欲しくて望んでいたという考えは，なぐさめになったという。彼一人家族の中で生物学的つながりがなかったのは確かだが，姉弟

や両親との関係はとても情愛に満ちたもので良好だった。しかし成長して18，9歳頃になるとエチオピアに興味をもつようになった。大学でソーシャルワーカーになる勉強をしていた彼は，必要なフィールドワーク実習の場にエチオピアを選んだ。「自分が生まれたところだったから。」1992年のことだった。そのときが最初のエチオピア訪問だった。

第三世界の国を訪問したのはこのときが初めてだったので，エチオピアがどういうところか全く想像がつかなかったが，現地ではすぐに順応し，エチオピアがとても好きになったという。

マークの出生国訪問は，既に紹介したジョンやブリジット，アンダースのような，現在成人した1960年代後半から1970年代前半生まれの韓国人養子の体験とは異なっている。彼らの中には，韓国で，周囲の人間と容貌は同じなのに，仕草が周囲と異なっているために受け入れてもらえなかったり，国際養子という事実が韓国内で周知されていなかったため，彼らの存在そのものが韓国の暗部あるいは恥部として韓国人に衝撃を与えたという体験をしている者が少なからずいる。[10] こうした出生国から疎外された経験が彼らを国際養子縁組そのものにとても批判的にさせていることがあるが，マークのエチオピア体験はそうではなかったようだ。

> エチオピアにはすべてを包容するような雰囲気がある。もちろん言葉を話せないことについてはいろいろ言われたけれど，エチオピア生まれだからエチオピア人だと受け入れてくれるところがある。アウトサイダーのような感覚をもったことは決してなかった。

それ以後2002年，2005年，2007年にもエチオピアを訪問している。2002年当時マークはスウェーデンのエチオピア・エリトリア協会の会長をしており（2006年まで），その会合がエチオピアの首都アジスアベバで開かれたからである。[11] エチオピア・エリトリア協会は，二つの国出身の国際養子のための団体で，養子間にネットワークをつくり，養子たちが体験を語り合う場を提供したり，エチオピア旅行や生みの親探しのための支援活動を行っている。[12] 2005年は妻のシャーロットと結婚式を挙げ養子縁組のための現地交渉のために，2007年は養子を引き取るために出かけた。

このように頻繁にエチオピアを訪れ，生まれてからいた孤児院をみつけだすことができ，2005年には養父母と再訪したけれど，生みの親を探したいという欲望は全くなかったらしい。

> でももちろん生みの親を探したいという養子の気持ちはわかる。スウェーデンでの家族との関係が良好だったら，養子は生みの親探しにはそれほど関心をもたない。でもそうでなかったらもっと興味をもつ。私の場合はとても愛情に満ちた関係だったから，みつけたいとは思わなかった。

だからといって，自らの中のエチオピア的なものを全く省みないのではなく，むしろその逆であるようだ。今マークは自分のアイデンティティについて85%から90%はスウェーデン人，15%ほどがエチオピア人だと言っている。

> もちろん主な文化的アイデンティティ，話す言葉，習慣，友人関係などはスウェーデン人のものだ。でもエチオピアのバックグラウンドに敬意を持つし関心もある。外見はエチオピアから来たことが一目瞭然だ。それが気に入っている部分だ。誰もが思っている以上に重要なのは，容貌がどう見えるかにアイデンティティの土台がヨーロッパではあるということだ。それはだからエチオピアから子供をもらうことが私にとってとても大事だったことの説明にもなると思う。

マークとシャーロットがサムボ関係に入ったのは2002年で，養子縁組を考え始めたのは2003年頃からだった。シャーロットには前の結婚でできた子供が三人いていずれも成人に達しており，彼女はこれ以上妊娠・出産を望まなかった。マークもエチオピア生まれの子供が欲しかった。「以前は自分自身の子供をもつことも考えたけれど，一番大切なのはエチオピアからの子供をもつということなんだ。同じ外見をしているからね。」二人はエチオピアからの養子縁組を決めた。「それが私たちの第一希望でした。」

養親になるためにはカップルは結婚していなければならない。既に述べたように二人は2005年にエチオピアで結婚式をあげ，現地で養子縁組のための活動を開始した。ストリートに捨てられた子供たちの福祉のために活動する民間の大きな組織のエチオピア代表と養子縁組のことを話し合い，現地機関との交渉にもいろいろ手助けしてもらったそうだ。「官僚的にしかものごとがすすまないところで現地の人と直接会うのは必要なことだった。」これは養親候補者としては珍しい行動である。申請書類を送った後スウェーデンやデンマークで養子が見つかったという知らせを待つのが多くの養親の場合だからである。マークがエチオピアに馴染みがあったということが大きな要因であるように思われる。

マークがヴィクを養子に迎えたのは2007年9月，ヴィクが生後5ヶ月の時だった。養子縁組の申請を地方自治体にしてから3年かかった。エチオピアから養子をもらうことは彼にとって重要な意味を持つだけではない。養子にとっても不可欠なものであるとマークは考えている。

> エチオピアからの養子は私が誰であるか明示してくれるし，彼（養子）も自分自身を（私を見て）見つめ直すことができる。私がそうだったように「自分は本当にお父さんの子供と言えるのだろうか」と自分の容貌に疑問を持つこともない。もちろん私は父の本当の息子で深く結びついていたから何か問題があったわけではないけれど，でもヴィクの場合は，私と彼の外見が同じエチオピア出身だから似ているということが，私が子供のときになげかけられていた問いから彼を守ってくれる。誰も彼が私の子供かどうかなんて決して問いかけてこないだろう。

ここからわかるように，両親や家族と強く結びついていたとはいえ，マークは子供の頃しばしば周囲から「で，実の親は誰なの」という質問をされ傷つけられた。「だって本当の（心理学的な）親は他にいないから。」エチオピア人の養子なら，自分のような経験をさせなくてすむのだ。

おわりに

スウェーデンで規模の最も大きい国際養子縁組斡旋団体であるアドプフーンスセントゥルムの職員であるエリザベスは，国際養子縁組について，一つとして同じ事例はなく，日々模索中だと述べた。養父母になった国際養子の総数がどれほどか確かでないにせよ数が多くないことは予想できる。その中からインタビューできたのがここで紹介した少数の人々であり，そこから一般的傾向を語るのは不可能であることを承知で，今後の研究の予備的見通しとして，紹介した事例から考えられる特徴を述べておきたい。

5組の養子家族の中で，養子縁組希望先として自分と同じ出生国を選んだのはマークとブリジットである。しかし幼い頃から自分の出生国である韓国を身近に感じ，成長して韓国の養子縁組の手

続きを気に入っていたブリジットに対して，外見という生物学的特徴にこだわったのはマークである。韓国を選んだのは「自然な」成り行きだったというブリジットだが，その場合の「自然」とはマークのような生物学的な「自然」と同じではない。彼にとって外見はアイデンティティを考える上での重要な要素なのである。しかしブリジットの場合，ジョンがいうように「養子であること」あるいは養子という関係性にいることが「自然」だったのである。(13)

マークの対極にいるのがカリンだろう。「赤ちゃんはどこからくるの」という問いかけに「私は飛行機で来た」と答えた彼女はことのほか養父母との絆ならびに彼らへの同一化が強く，幼い頃の彼女にとって出生国とは彼女を養父母から切り離す脅威でしかなかったといっても言い過ぎではあるまい。

しかし，マークにしても，エチオピアで生物学的親を探し出そうという強い衝動をもっているわけではない。周囲のこころない質問に悩まされつつも，彼にとって本当の親は「養父母」なのである。エチオピアという選択は，自身以上に養子への配慮からの選択であったように思われる。

サンドラもはじめは同じ外見，同じ「人種」をと思っていたようだが，養子申請のプロセスの推移とともに変化した。ジョンの場合同様，選択は，結果的に同じ「人種」の国であるにせよ，手続きにかかる時間や医学的検査の充実など「実利的」な理由によるところが大きい。ある意味でブリジットの場合も彼らと同じといえよう。この傾向は多くの養親候補者と同じである。外見に象徴される生物学（遺伝）的要素はいつも彼らの傍らにあり無視できるものではないが，すべてを決定するものでもない。それは彼らの養子に対するダブルアイデンティティへの向き合い方に見てとることができるように思われる。

養父母になった養子は，その養父母が彼らを引き取りに出生国まで出かけなかった世代に属する。そのため彼らの養父母の出生国についての知識は乏しく，彼らが出生国について触れる機会は少なかった。彼らは，何よりもまずスウェーデン人・デンマーク人として自己規定して成長した。そのことに彼らは疑問をもってはいなかった。85～90%スウェーデン人というマークも成人するまでは例外ではない。

とはいえ，たとえ韓国人・エクアドル人としてのアイデンティティを形成する可能性はないにしても，出生国について触れる機会があれば，それに越したことはないとも考えている。子供が望むなら，出生国の文化について情報が得られる可能性を排除しないようにしておくことが大切なのである。しかしそれは，養子がスウェーデン人あるいはデンマーク人であると同じくらいに出生国の人間であるとみなすということではない。

サンドラは二人の養子が南アフリカというバックグラウンドに誇りを持ってほしいと思っているが，彼らの国は，彼女の場合同様スウェーデンだと語った。アンダースとカリンはヴィクにベトナムのことをもっと知ってほしいし，「ベトナムへぜひ行きたいと彼が言ってくれるようになってほしい」と思っている。しかし，他の多くの養父母同様に，ベトナムの行事や習慣を何度も祝うのは，「ヴィクがそして彼の生まれた国がどんなに大事かを示す私たちなりのやり方」なのであり，彼ら自身の体験を踏まえれば，息子にベトナム人になってほしいわけではあるまい。

サンドラにしてもアンダース・カリン夫婦にしても，養子と実子もともに彼らの「本当の子供」なのである。欧米ではnature or nurture（氏か育ちか）といい，遺伝子がすべてを決定するとい

う近年の遺伝子本質主義的な傾向から，前者へ軍配をあげがちだと思われているが，本稿で紹介した養父母になった国際養子の場合は，nurture つまり日常の関係性を重視している。しかし，nature も排除せず，その意味では nurture and nature として家族関係を了解しているのではないだろうか。

国連のこどもの権利条約や国際養子縁組に関するハーグ条約[14]，さらには配偶子提供による不妊治療におけるドナーの非匿名を法律で定める動き[15]などによって，親子関係とは生物学的・遺伝子的関係であり，それは決して解消できないという観念がグローバル化しつつある［Howell 2007：19, Howell 2003］。しかしその源である欧米社会が，そうした考えによってすみずみまで席巻されているととらえるのは，「オクシデンタリズム」（逆向きのオリエンタリズム）というべきであろう[16]。遺伝子や生物学的起源によって決定されるアイデンティティがすべてではないと実感している人々の声を抑圧してはならない。

【謝辞】

本稿のもとになった調査は，科学研究助成特定領域 2「身体資源の構築と配分における生態・象徴・医療の相互連関」（菅原和孝代表，2003 年 8 月～ 9 月），科学研究費補助金基盤研究 A1「新生殖医療に起因する国境を越えた社会・文化的諸問題の実証的研究」（上杉富之代表，2007 年 8 ～ 9 月），科学研究費補助金基盤研究（B）「新生殖技術の実用化に伴う親子･家族･婚姻関係の再編に関する国際比較」（上杉富之代表，2008 年 10 月，2009 年 8 ～ 9 月）によって可能になった。こころよく取材に応じてくださった養子・養父母の方々，未公刊のデータをお送りいただいたピーター・セルマン博士，国際養子家族を紹介してくださったアドプフーンスセントゥルム，また調査に同行され様々な助言を賜った石原理埼玉医科大学教授に深く感謝したい。

註

（1）――関係者の間では intercountry adoption という語が使われているが，人類学や社会学では，今日 transnational adoption の語がよく使用されている。

（2）――スペインの国際養子縁組については Marre の研究を参照［Marre 2007］。

（3）――一方国会議事堂で働くエヴァはイルヴァと違って，IVF の治療を受けていたが，3 回で治療をやめベトナムからの養子をもらった。エヴァの場合もイルヴァ同様周囲に国際養子がいた。彼女の母方叔父は国際養子を四人（三人は韓国から，一人はタイから）育てており，エヴァ自身より年少だったので，彼女は彼らのベビーシッターをして彼らと親しくなり生活をともにしたという体験がある。だから親戚の中にアジアからの養子がいるというのは少しも奇妙なことではなく，そのため彼女が国際養子を考えたとき，養子の出生国としてアジアを選んだのは自然な成り行きだったという。

（4）――1 スウェーデン・クローネは約 15 円。

（5）――ジョンが養子にきた当時のスウェーデンの養親たちは，子どもの出生国を訪問して子どもを引き取ることはなかった。従って出生国を訪れたことがなくその文化や社会にも触れる機会がなかったのである。

（6）――サムボ（sambo）とは同棲のことだが，正式に結婚した法律婚カップル同様の権利を認められており，サムボと結婚のあいだに実質的違いはないという。国際養子縁組の場合も，法律婚を義務づけるのは出生国側である。

（7）――政府機関は個々の養子縁組に関与するのではなく，民間の団体が法律や国際養子縁組に関するハーグ協定に従って活動しているかをチェックするのがその役目となる。

（8）――デンマークやスウェーデンでは，子供は二人以上いるべきだと考える人たちが多い。親が亡くなったと

き，支えになるのはキョーダイだからという説明を耳にすることがある。そのため，何らかの理由で実子が持てなくなった場合，既に実子が一人いても二人目は養子をもらうカップルも少なからずいる。

(9)――フィンランドのエスポーに住むベッティとトム夫婦（ともに1964年生まれ）は1989年から一緒に暮らしだし，子供が欲しかったがなかなかできなかった。ふたりは養子縁組を考え手続きを始めていたが，あるときベッティが妊娠したため，養子申請は取り下げなければならなくなった。夫婦には1992年双子が生まれた。しかし夫婦は双子が6歳になるともう一人子供が欲しくなり，養子縁組を考えるようになった。そこで再度申請し，2001年に中国から養女をもらった。夫妻は「養女が本当は長女だって私たちはいつも話すのさ，だって双子が生まれる前に養子を考えていたから。」彼らが親になったのは養子をもらおうと手続きを開始した時からといえよう。だから後から生まれたにもかかわらず養女は「長女」という特別な存在になるのである。スウェーデンの隣国フィンランドで国際養子縁組が本格的にスタートしたのは1980年代に入ってからであるが，今ではすっかり定着している。

(10)――韓国から主に養子に出されるのは，未婚の女性が生んだため族譜に記されることのない社会的に存在しない子供たちであり，そうした子供の世話を欧米に頼るのが屈辱と受けとられていたのである［cf. Kim 2007；503］。しかし今日では韓国は国家として国際養子を海外居住の韓国人として位置づけ，彼らの訪問を積極的に歓迎している。その背景に，養子先で裕福な家庭に暮らし高学歴でもある韓国生まれの養子からの支援への期待が透けて見える［Kim 2007；506-7］。2005年に韓国に二人目の養子を引き取りにいったストックホルム在住の女性は，ソウルの地下鉄で韓国からの養子である長男を連れていたら，韓国人が積極的に話しかけてきて子供に親切にしてくれたと語った。

(11)――この協会については，インベソンも言及している［Yngvesson 2007；573-4］。

(12)――エチオピアで生みの親を見つけられる可能性は50%だとマークはいう。養子縁組斡旋機関などでは，見つけるのはとても困難だという。「とても」というほどではなく，二人に一人は生みの親と連絡がとれるらしい。

(13)――インベソンも国際養子の間で「親族」(kinship)の意味に幅があり，変動していることを指摘している［Yngvesson 2007；575-6］。

(14)――1989年に採択された国連こどもの権利条約第七条一には「児童は，出生の後直ちに登録される。児童は，出生のときから氏名を有する権利及び国籍を取得する権利を有するものとし，またできる限りその父母を知りかつその父母によって養育される権利を有する」とある。「その父母」とは一般に遺伝子上の親と見なされている。また1995年から施行開始された「国際養子縁組における子どもの保護と協力条約」通称ハーグ条約では，国内での子どもの引き取り手がみつからず，国際養子縁組が子どもにとって最善の措置であると判断された場合に限って手続きを開始するようにと述べられている。そこには，遺伝的にかけ離れていない人々の周りで暮らせるのが，外見の違いや差別を気にする必要もないから好ましいという判断が潜んでいる［拙稿 2007：302-3］。

(15)――スウェーデンでは，DI（非配偶者間人工授精）で生まれた子どもが成人後生物学的父親にあたる精子提供者を知る権利を認めた人工授精法が，1985年から施行された。これを受け，隣国のノルウェーでも2005年にDIにおける精子提供者の非匿名化に踏み切った［出口・石原 2006］。

(16)――むしろ日本の方が，血のつながりというイデオロギーへのこだわりが強いように思われる。市民向けの公開講座で国際養子縁組について講演したとき，参加者の70代男性は，肌の色も目の色も異なる外国からの子どもを養子に迎えることは想像もできないことと語った。またある大学で国際養子について講義した後，日本で普及するか感想を求めたところ，多くの学生が困難だと回答した。「人種」の違う子どもがいると学校や地域で差別やいじめにあうからというのがその理由である。こうしたことが，日本国内の養子縁組自体の数が少なく，特別養子縁組についてはその数が減少している事実とどのように関係するかは今後の検討課題としたい。

引用文献

出口 顯 2007「国際養子縁組におけるアイデンティティの問題：スウェーデンの場合」 菅原和孝編 『身体資源の共有』 弘文堂

出口 顯・石原 理 2006 「ノルウェー・スウェーデンの非匿名配偶子提供」『産科と婦人科』73-7：925-931

Gullestad, M. 2006 Plausible Prejudice: Everyday Experiences and Social Images of Nation, Culture and Race, Universitetforlaget

Howell, S. 2003 The Diffusion of Moral Values in a Global Perspective, in Eriksen, T.H.（ed.）Globalisation: Studies in Anthropology, Pluto Press

---------- 2006 The Kinning of Foreigners: Transnational Adoption in a Global Perspective, Berghahn Books

---------- 2007 Imagined Kin, Place and Community: Some Paradoxes in the Transnational Movements of Children in Adoption, in Lien, M.E. and M. Melhuus（eds.）Holding Worlds Together: Ethnographies of Knowing and Belonging, Berghahn Books

Kim, E. 2007 Our Adoptee, Our Alien: Transnational Adoptees as Specters of Foreigness and Family in South Korea, Anthropological Quarterly 80（2）; 497-531

Marre, D. 2007 'I Want Her to Learn Her Language and Maintain Her Culture' : Transnational Adoptive Families' View of 'Cultural Origins', in Wade, P.（ed.）Race, Ethnicity and Nation: Perspectives from Kinship and Genetics, Berghahn Books

Marre, D. and J. Bestard 2009 The Family Body: Persons, Bodies, and Resemblance, in Edwards, J. and C. Salazar（eds.）European Kinship in the Age of Biotechnology, Berghahn Books

Selman, P. forthcoming The Rise and Fall of Intercountry Adoption, International Social Work（ special edition on Intercountry Adoption）

Yngvesson, B. 2007 Refiguring Kinship in the Space of Adoption, Anthropological Quarterly 80（2）；561-579

（島根大学法文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2010 年 9 月 27 日受付，2011 年 2 月 21 日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol.169 November 2011

Transnational Adoptees Who Became Transnational Adoptive Parents : Scandinavian Cases

DEGUCHI Akira

In this paper I describe five cases of transnational adoptees who became transnational adoptive parents in Sweden and Denmark. In theses countries transnational adoption has a history of more than 40 years, and has become the second most popular choice for infertile couples wishing to start a family. Some adoptees also became adoptive parents. For them nature (biological and genetic relations) is not an absolute criterion for defining the parent- child relationship. An adoptive child is as 'true' a child for them as is any biological child.

Keywords: transnational adoption, Sweden, Denmark, identity, biological parent-child relationship